

須野は忽ち遠くなり、常根山は遙かに立てり、常が立とは情ないが左まで山姫に嫌はるゝ身分とも思はねば是は大方拳匪へ對し疾く歸れとの禁厭ならんと我田引水手前勝手人のみ悪く思ふ間に宇都宮へ着したるは正午を少し過たる頃なり、此停車場のプラットホームに一時間ほど涼ませられて漸やく日光行の汽車に乗替へ又ガタ／＼と揺らるゝ程に左しもの竹翁も里心や附きけん以前の様な勢ひ見え、此汽車が二時半過に日光へ着くとすれば其儘町に泊らねばならぬが夫は頗るタチタチだ素より我々は幾度もお廟を拜む心はなく紅葉ばかりが目的だから大俗極まる日光町に一晚居られるものではない尤も木鼻が乗移つて居る

から夜中山をぶらついても必ず兩眼明にて闇にも絶景は見えるであらうが山おろしに風邪を引いては却て體の害になるから左様いふ譯にも行くまいと殊の外のシヨゲ加減なり、予は何とか知恵をふるひ大に翁を勵まさんものと未成品の羽扇即ち木鼻の片羽を持つて孔明の身振をなせども差當つては妙計が出ず、鹿沼文挾を打過て跡は今市日光と押詰りし時に臨みナント此智恵は何うですソレ日光から中禪寺へ行く山間に馬返しといふ所がありませう慥か彼處に宿屋が一軒ある筈ゆる汽車を下りたら日光町を通り抜け日一杯に馬返しへ行つて極々物淋しい山里へ泊り木鼻物の木鼻物たる所以を示して日光泊りの棕鳥とは全

く毛色が違つて居ると感服させるなどは大通ですぜ道案内は知つて居るから何處かの茶店に腰を掛け宿屋の有無さへ確めて置けば外に案じる事はありますまいと大名案を提出すれば竹翁見るく景氣づき昨宵の猿が滋養になつて俄に湧いた猿智恵で柳子の兵法を講ずるかと思ひの外君にしては近頃の出来だ是非馬返しに出掛るよと乘氣になるも馬に縁あり

(十八)

竹の屋主人

馬返し泊りの名策に、シヨゲたる予は鬘を振つて高嘶きの大元氣、心猿意馬といふときは馬はまことに予に縁あり、白霧山深うして鳥の聲さへ稀なる所に蝙蝠乎として木鳥羽を擴んことい

かに樂かるべきか、早く行かんと汽車にも鞭を加へんほどに狂ひ出せば寅彦子は其の知恵に誇ること嘯きて風も生ぜんほどなり、午後二時半過日光に汽車は停まる、馬返し泊りは近年の大名案としたところで宿屋が確にありませうか僕の來たのは二十年も前の事だが其時は茶店のほか宿屋はなかつたやうだがと心猿手綱を控へて躊躇すれば、ナニ確サ若し宿屋がなければ中禪寺へ乗越すばかり「水澤を過て劍ヶ峯華嚴の瀧の音高く中禪寺は譯もなし」へん日光唱歌といふものを作つて斯ういふ工合に歌ひながら登るくらゐなものだと鞆のあたりを一つ打叩くほどの威勢に予も寅彦子の其威を假り、左様々々譯なし馬返で宿屋

がチウなら中禪寺中禪寺でチウなら湯元までだと何が何やら今
 度は狐を馬へ乗せたやうになり停車場を出ればよき獲物ござん
 なれといふ譯ではなからうが例の宿引一名棕鳥引今日は木鼻引
 と名を更へでもしたか我々二人を追取圍んで喋々たり、是も思
 へば人の深切、日光はじめてなら案内もせん泊る所定まらずば
 泊てもやらん空腹ならば飯も喰せんと涙の溢るゝほど有難き思
 召す所も知らず名も知らぬアカの他人の我々を猿ども寅ども見
 棄すに人がましく思ひて斯く情ある詞を掛けて下さること如何
 なる慈善家の集合ぞや、ア、と大いに感歎すべきを木鼻物の悲
 しき見向きもやらすエ、可厭日本のうちにもまだこんな所が有

るかど罰あたりの事を云ひて此園を出で但有る商店へ入りて草
 履を買ひて下駄を明日の歸りまでと預け甚だ失禮ですがど半壞
 の麥酒を進物とし此にて馬返しの宿屋の事を問へば、エ、ござ
 いますとも葛屋といふ能い宿がございますと細に教へられて柳
 子手を拍ち、違ひない葛屋々々此前來たとき皆が此の家へ泊り
 たいもんだと云たくらる閑静で能い家だ左様聞たら髣髴と家か
 ら山の景色まで目にうかぶやうだ、ヤ僕も草履となれば千人力
 だサア何様な絶景でも持て来いピクともするのぢやアないど兩
 人また更に勇をなし内儀に厚く禮を述べて鉢石町を悠然と歩ん
 で見れば水に富みたる山の麓の市として兩側に水道を引きありま

九華殿の瀧の水力をかり電氣燈を家々に點じ夜も不夜城を輝く
 由なり西洋人一點張の大きな商店も多く小西神山の兩ホテル
 などいと目ざましきものに見えたり、大谷川に架す橋を渡りは
 じめて身を白雲紅葉の仙境において見れば神々しくも心地清々
 しく兩人早くも腋に片羽づゝ生えたるおもひをなし朱塗の神橋
 の下に流るゝ大谷川の岩に砕けて雪となり湛へて藍の淵をなす
 を見て鹽原の帯川の水色より白くも青くもまさりて奇麗なりと
 褒め見上げては千仞の巖を彩る今を盛りの紅葉の色を稱へ、鹽
 原もよかつたが此の景色もまた能い此橋が有るので格別だと腰
 を抜かして少時眺めしが山は日暮の早くして止りて居ては風も

肌はだに冷ひやかなればイザとばかりに歩あゆみ出いせしが朝鹽原あさしほがらにて少酌せうしやくせ
 しまゝ車くるまと汽車きしやの都合つがひにて晝食ひるめしせず日光ひつぐわつの市まちさへも脱はなるが如ごとく
 に通とほりしなれば此こゝに到いたつて三時半過じはんすぎ弓手ゆんでに見みゆる啼蟲山なみむしやまの其
 の山やまの名なは腹はらにありけり

(十九)

寅

彦

腹はらの中なかの啼蟲山なみむしやまと竹翁ちくおきなは際ぎはどい所ところで山やまの名なを物ものにすれども此方こなた
 は一層そうの空腹くうよくに唯喰ただくひたいと思おもふのみにて山やまなどは眼めに附つか
 ず、古語こごに曰いはずや鹿しかを逐おふ獵師れつしは山やまを見みずと予われは猿さるの肉にくと共とも
 に例れいのクラ公こうを引擔ひつかつげば鹿しかを負おふ柳子山りゅうしやまを見みずと言いひ換かへたい
 程ほどに惱なやみつゝ大谷川おほいやがはの流ながに沿よふて先まへと進すすみ行ゆけば神橋かみはしあ

たりに引替へて境は搔撫の凡景と變じいよ／＼空腹を覺ゆるのみなり、竹翁も馬返行の勇氣のみは充滿たれども兵糧攻には楯もつかれず此邊には栗山蕎麥と云つて名物の蕎麥がある筈だ眺めの能い川端に蕎麥を喰はせる茶店があつたら見落さずに入らうぜと喰物の事を言出されて予は眼の眩むほどに身にこたへ小家二三軒見ゆる方へ急足にて行懸るを竹翁は呼止めオイ／＼君は何をするのだ、アノ店に焼芋があるから一寸二三本……、
 エ、情ない男だ其様な物を買ふ奴があるものか廢し玉へ／＼と窘められて首グンニヤリ折角開け掛し蝦蟇口を再び懷中へ押込でホツと息を吐くと共に一時に出る身の疲勞、今日徒歩にて辿

しは鹽原道を二里許り日光にては十餘丁に足るや足らずの里程を今歩き來しのみなるに草臥加減は八里半芋屋の門に元氣も失せて九里に近くも辿りしかと自ら疑ふぞ哀れなる、斯て含滿ヶ淵の傍らを通れば景色殊に物凄く苔蒸したる對岸の巨巖に男女の西洋人床几を立て左も面白氣に遊ぶ躰は白馬會の油繪の如く此方の岸には日光藝妓が楓の折枝を車に附け家路を指して急ぎ來る極彩色の顔かたち小説口繪の美人に似たり、但し鞆鞆たる水音の筋に響いて怖しく岩を噛んでさつと落す奔湍の形容は空腹の我々の眼に雪とも見えす糸とも見えす宛ら名物栗山蕎麥を亂し掛たる如くにて漫ろに煩惱の起るに付け道の芝生に置くつ

ゆも尾上の風のあろしといふも皆人ぢらしの種ぞかし、分けて
 予はさもしければ此あたりの山毎に雑木の黄色に染めたるを焼
 芋に思寄せアレあんなに煙りが立つホカ〜と暖かく煙の立つ
 は山人が落葉朽葉を焚くにやあらん平生なら風情ありと見るべ
 きに此ひもじさでは風流心も何處へか行つて仕舞つたと稍一里
 餘も辿り行けば軒端も煤に黒みたる一軒の茶店あり、何うです
 暫らく休みませんか足が棒になりましたと翁を勧めて這入り行
 けば紅葉散布く椽側に煙草盆は備へてあれど家の内には人影な
 く左手の入口に七歳八歳の子供二人箆を中に立懸つて山盛にせ
 し怪しの木實を餘念もなく喰ひ居れり、オイ〜誰も居ないか

子と庭先に佇立めば子供は家の後に向ひ阿母アお客だど二聲三
 聲、應とこたふる母の返事は川邊の林のうちに聞えて枯木の枝
 を前垂に押包みつゝ出來りサア〜お掛下さいましと狼狽て、
 待遇すも鄙びたり、お内儀さん店先にお菓子が列べてあるやう
 だから一つ二つ摘むよと予は早や我慢が出來ず直ちに駄菓子
 頬張りし上箆の木實にも手を出して不思議〜と味へば大聖も
 亦朝三暮四の猿の本性顯して口の爲には落着かれず、朝四暮三
 の欺しより美味しといふに迂濶と乗つて同じ様に之を摘み見た
 所は山葡萄の様だが内儀さんこれは何といふ子美味くもないが
 變なものだと其名を問へば茶店の嗅はマツアサなりと答へたり

(二十)

竹の屋主人

日光山中に八九月ごろ熟す草の實あり富士山にある濱梨子といふものに似たり丹頂の鶴好んでこれを啄むゆえ齡を延る藥なりといふ今此の茶店の噂が云ふマツフサは夫に似たり志かも蔓の實で藥だそうでございますと聞けば何やら好もしく酸いだけの實を嘗りながら丹頂は少し氣になるが鶴が喰つて長命をするとは頼もしい千年は兎もあれ是も初物また七十五日がところ儲かつたサア此勢ひで急がうと茶店を出るところは彼方此方に夕餉の煙淋しげなり、山に向つて進み入る者はなく紅葉を鞍につけ又は駕の上に結び添へ或は椅子の上に挿し下り來る西洋人の男女

多く日本人はまた稀なり、掛茶屋などは人かへりて空なるにいとよく心細く草臥足を引摺り空るい腹を抱へ漸やく清瀧へ着き足尾道を右へ切れて進むに是よりは砂利敷の登りにて又弱り五歩に一休み十歩に一憩ひ、如何ですな日光から馬返し迄二里といふのを大丈夫三里は歩いたがまだ着かぬところを思ふと行き抜けて仕舞ツたのではあるまいかとケラを括りつけし蝙蝠傘を力に志ばしイめば、ナニサ道は大丈夫ソレ御覽なさい彼の煙のあがるところが馬返しでせう譯はない最う一跳だと勇みをつける柳子の聲も思做しにや引入て聞えたり、煙を志るしに岩道を三四丁行けばこれは杵人の薪を束ねながら暖をとる爲の焚火な

り、火の影を見れば寒く思はれ夕風に袖搔き合せて岩に腰掛け
 散る紅葉を身に浴ながら「奥山に紅葉踏み分け泣く人の聲聞く
 時ぞ旅は悲き」と打誦じぬればさすが柳子もあはれとや思ひけ
 ん共に太息を吐くのみなり、ハテ清瀧から曲つて此様に有る筈
 はないがイヤ大丈夫々々彼處が裏見の瀧へ行く道だモウ全く二
 三丁澤山あつて四五丁ですイヨ素敵々々御覽なさい月がしまし
 たと指示す方を見れば瀨の音高き川を隔てし向ふの山に八日の
 月はさし登りぬ、雲か夜霧か朧々ど光は淡けれど所がらいと面
 白きに少しは景氣づきて予も素敵素敵の受賣をなし、此秋山晚
 景といふ畫中の人物になる風流を知らないでガイドの蔓るホテ

ルに立迷つたり揉手で饒舌立る番頭に生捕れる棕鳥物といふも
 のは氣の毒な者だソコへ行くど我々は感心だよ空腹のも草臥た
 のも只風流の爲の勤だから、左様々々秋山空腹の圖と来ては實
 に風流を極めると空腹あまりにさもしい事を云出し笑へば少し
 は足も軽く歩むに程なく馬返しへ着き蔦屋の店を見れば五六脚
 の床几は並べたまゝの上に紅葉散りしき人は夕餉の支度に母屋
 へ集りしか一人もあらずツツト入りてオイ二人泊て貰ひたいが
 どおとなへば、お泊りだよと女中が云つぐ聲ばかりして人出で
 ずこれはお生憎さまと断りでもさるゝかど案じるうちに此方へ
 と案内して二階座敷へ通し内儀出て私方はお休み御晝食が重で

お泊りが少なうございませので座敷も行届きませんが如何か御
 緩りどと謙遜していろく深切の取扱ひに兩人は安堵の腰を据
 えたり、おもへば鹽原は鹽溪奇勝流の支那かぶれ兔や薄までが
 和名がられる上に拳匪の難あり日光はまた西洋人に占領され日
 本人たる我々は中有にさまよふ姿なりしが此の山間に一小居留
 地ありて大いに木梟羽を伸さんとは殊に下物はと問へば鶉の焼
 鳥といふに兩人等しく素敵素敵と忽ち勢ひ熾なり

(二十一)

寅

彦

其時の女中の言葉に鶉を略してつぐと云へり、濁音一つを打替
 れば倏ちつぐと變ずるが木梟なら巨巖の上に限り珍味がるべき

代物なれどつぐの美味さは場所を選まざ雅俗共に賞翫するから
 座敷で舌を鳴すに足れり是即ち舌つぐみを打つとも謂つべしだ
 と早速に料理を命じ女中を下へ遣りし跡には兩人莞爾々々と顔
 見合せ、實にこゝは仙郷だね人家僅に二三軒の山中に宿を取り
 鶉の焼鳥を味つて一杯と來た日には藥にしたくも言分なしたが
 天二物を與へずでサアも風呂をと云ふ譯には行まい若し五右衛
 門風呂でも沸して呉れば今宵の泊りの値は萬兩石川や濱の眞砂
 は盡るとも世に旅人の喜悅は盡ぬが是は榮耀に餅の皮ゆゑ毫し
 の事は我慢すべしと話し合つて居る處へ女中再び立現れお風呂
 の湯が沸きましたお浴衣をこれに置きますゆゑ直ぐにお召し下

さいましハイ／＼お兩人でもお三人でも御一緒に這入られます
 と思ひの外の一言にヤア夫は難有いと東京の自宅の庭へ一夜の
 内に温泉が湧出した程の喜びなり、何は兎もあれ疲れて居るから
 急いで一風呂浴びやうと母屋の湯殿へ行て見れば湯漕板の間も
 狭からず湯は屋後に峙ちたる千仞の絶壁より幾條となく流れ落
 る飛泉の水を桶にて引き直に沸せしものと見へて清冽玉の如く
 なれば是は／＼と感じ入り、成程四邊が水だらけだから譯なく
 風呂を沸す筈だそれ顔を洗ふ所には山から簀が掛つて居て奇麗
 な水が流れるではないかイヤ何もかも氣持が能いと入浴して居
 る鼻先へ隙漏る風の持來るは焼鳥の鶉のかほり忽ち空腹へ侵入

して五臟六腑を搔むしるにぞ最う堪らぬと飛んで出で舊の座敷
 へ立歸れば膳部は眼前へ列びたり、兩人は酒を酌みながら女中
 の話しに耳を傾けフウ左様かい此鶉は今朝捕れたのを四五十羽
 も賣りに來たから買つて置いた代物かね如何にも新しく結構
 だが其鹽梅では明日の朝も來るだらう來たなら土産に買つて行
 くから其積りで居ても呉れナニ土地の産物には椎茸があるとい
 や其奴も明日の朝喰せて貰はうトコロで蕎麥は何うだ子夫も明
 日は出來るかへ奇妙々々素敵々々と悦に入る様先へ峯の月の差
 込めば疊の上に楓の影あり、ア、風流の行止り是より膝栗毛の
 馬返しと定め最う中禪寺へ行くには及ばぬ夜が明けたなら此界

隈の紅葉を見物して引返す事にしやうではないか楽しみは極む可
 らずとか言ふ通り此上の風流を望めば何んな定義を下すやうな
 羽目になるかも計られない人間萬事塞翁の馬返し此仙郷の福ひ
 が禍ひの基とならぬうち轡列を引返し木鼻物同士の馬は馬連れ
 足列揃へて馬返し唯だ馬返し〜と相談を纏めしうへ猶も酒を
 傾くれば酔心地常ならず、道を隔てし森陰の急流のどいろく音
 は遠く山彦のこだまに響き家を遶る泉の聲は近く寅彦の耳を洗
 ひて鶉以外の好下物となれば涎を流して打喜び此閑静なところ
 丈でも無性に酒を進めるやうだと愈々酒杯を重ねしが竹翁は早
 や充分なれば大概にして寐るとしやうと女中に杯盤を下げさせ

ながら、今夜は土地に對しても俗張つた夢は見られないせ夢に
 木鼻となつて紅葉の枝にとまる位ゐの心懸はありたいものだ
 床をのべるを待掛けたり

(二十二)

竹の屋主人

夢の清さも思れはて寝につけば水の音はいよく枕に近く川の
 音も微妙なる音楽のごとく響き恍惚として仙郷へ引入れられて
 仕舞ひしが夜半ごろ身の熱しるに目はさめて山中ゆゑ寒くこそ
 あるべきに斯く暑きは昨日一昨日鹽原の温泉に幾度か入し爲め
 浴熱病を發せしならずやと身体を撫ればまど〜汗なり且つ齒も
 痛み出して堪がたければスハヤ又旅に病んでの一句を擔ぎ出す

事かど驚きすでに木鼻となつて紅葉の枝へ止らんとする柳子の
 夢を呼びさまし浴熱病に罹りしか暑さ堪へがたしと云へば柳子
 は打笑ひ熱いのは僕も茹つて仕舞ふほどだが人の深切を無にも
 ならないから清冽玉の如き先刻の風呂に入つて居る氣で堪へて
 居る浴熱病どころか君が今まで何とも云ぬは能く寐つ病とも云
 べしだ夜着を一枚も取なさいと云れて心付けば女中達が床を伸
 べるとき内儀見分し山の中でお寒いから能く氣を付けて上げる
 と云ひ付し爲め厚き蒲團三枚重ね上に大夜着また三枚襦袢に浴
 衣を重ねし寐衣にて夫へ潜り込しなれば儲こそ蒸すが如くに熱
 かりしなり何の事だ厚い情とは此事だ左様聞て見れば氣分に變

りはないどころかズンド爽かだドレ用足ながら冷々と山風にあ
 たつて來やうと是より夜着を二枚跳ね退け平生は吊夜着でお休
 み遊ばすものが斯う壓石を掛けられちやア夢も重苦しかつた筈
 だと打戯ぶれて又寐の床に平常より寐過て往來の人聲に驚きさ
 め戸を繰り明けて見れば霧か細雨か濛々たれど時は七時に近か
 りけり、サア、白雲紅葉の本場を見廻つて清冽玉の如き流れ
 で顔も頭も洗ひませうと草履にてアラ、と出かけて見れば林
 の中に石の鳥居の倒れたるありこれぞ男體山の一の鳥居なりし
 なるべし細雨を降る山道を上り進めば紅葉左右の山を彩り溪
 流は雪を散らすが如し深澤の柴橋の渡り危しかりしところも新

道開けて川を渡らず前二荒山の崖下に添ふて中禪寺まで車も馬も通ふやうになれり先づ望遠鏡を取り出して風穴を仰ぎ見屏風岩を眺め絶景絶景日光の觀楓の樂しみをきはめず此から返るなどは實に風流だ清福は享け盡すべからず半分は天道様にお預け申して置いて大に利殖してポツ／＼小出しに用ふ事にせうと立止りて劍が峯の方を見やれば雨雲は山の半に立まよひ峯は朝日の光をうけて紅葉黄葉あざやかなり、奇觀々々馬返しへ泊らなければ此の奇景は見られない我ながら馬返しへ泊るといふ智恵はよく出たよと柳子また腮撫でなり、餘り厚い夜具の待遇に逆上て仕舞つた君も智恵がる逆上を此の瀧で冷し玉へと小瀧のも

とへ立寄りたれど飛沫で全身濡れるに是非なく道を横きり流れ澤へ瀧と落ちる小流にて頭を洗ひ清冽がる事大方ならず、柳子も同く顔と頭を洗ひ清冽を通り越して寒冽玉の如しだ此水が凍れば大かた硝子になるのだらう儲々日光は硝子の原料の多い所だと與太流の考へ、ソレが君の本統の智恵だ馬返し泊りの分別は全く猿が滋養になつて出たのだから到底僕の分別と云て宜いのだトキニ今朝はまた椎茸といふ珍物だ此山の自然産だから賑甘からう日光が結構と響かせるなら以來馬返しは甘がりしと改むべしと柳子に分別の手本を示す

日光が結構なら馬返しは甘かりしと改むべしと分別の手本を示されしが此手本も洒落の以呂波、角文字の角を生して言争ふ程の價値もないと仇口たらしく蕙屋へ引返せば朝酒の下物として自然産の椎茸は膳の端に現れ出でたり、這は難有しと味はふ處へ手打蕎麥をも持出し諸徐ろに説くを聞けば今日は舊曆九月九日にて此日をお山仕舞と稱へ山上に住む者は一先づ日光の市へ下り冬籠りをする慣ひなれば其祝ひとして蕎麥を打ち客にも馳走するなりとぞ、我々は此時まで菊の節句も忘れ居しが圖らず日光の高きに登つて重陽の宴を開く九々の數の陽氣の遊山、菊花の酒は酌まずとも蕎麥の酒を傾くれば彼の彭祖の齡ひより延

びると云ふに縁深しと喜んで箸を取るに山家の蕎麥の色黒くゾロくとは啜り兼てボキくど噛折る鹽梅少々口には合ぬども香り高くして風流なり、斯て朝飯も果たれど鵜を賣に來らざれば土産の事は斷念しケラと猿とクラ鹿があれば左まで慾を張るでもないど發足の支度を整へ十一時二十分日光發の汽車に乗るには徒歩では到底覺束ないから人力車が欲しいものだと宿に周旋を頼みしが夜具蒲團六枚に人間を蒸した程の厚い情の人々も片山里の悲しきに五六臺も拵へて兩人の者の乗た車を車で圍むといふ自由は利かず、僅に一挺居合せたるを雇入れしのみなれば竹翁先乗車して蕙屋の門を出發し途中に於て今一挺客待の車

夫をかたらひ迎ひとしてよこしたれば予も續て是に飛乗り石高道を眞一文字蕪々地に驅けさせて程なく竹翁の車に追着き、何うです迅かつでせう車の上にながら木鼻の片羽を動かして居たので車夫も大いに助かつた譯です陰徳あれば陽報ありで必ず汽車にも間に合ひませうと二臺揃つて日光へ行き例の一商店に立寄て預け置きし物を受取り其返禮に日光下駄二足を買て再び車を挽出させ同所の停車場に乘付れば未だ充分の時間あり、是が爲に周章る事なく緩りと乗込んで發車すれば空模様遽に變りて見る／＼濃霧四邊に立籠め果は咫尺も辨せぬまでに物凄き景色となりぬ、竹翁は大得意になり先刻の車夫も今日の午

後は雨でせうと言て居たが僕の立去ると共に空の變るは争はれないものではないかと自慢のうち各驛を過ぎ宇都宮より小山に到れば又も眼に着くは親子ドンブリの賣物なり、家鶏の垂尾の長々と汽車發着毎に賣て居ては冷て玉子の氣味が悪く迎も口が附られまいと餘計な事を心配しつゝ車窓よりプラツトホームを見れば其處にドンブリの料理場ありて勢ひよく火を起し盛んに鍋を暖め居れり、イヤあれなれば大通だ一つ買はうと言ふ間もなく汽車は運轉を始めしかば如何ともする事能はず曩に常川の遭難を思出し親子ドンブリと怪痴を附け人を呪ひし報いにて空しく美味さうな香を嗅ぎ仇に過行く我鼻も穴二つとは怖いも

のなり是より上野に着くまでは予へ義理として雨天となれば
 聊ながら面を起し日光では霧が降り此處等では義理が降ると
 打喜ぶ甲斐もなく東台の麓に下車すれば再びカラリと霧波りて
 大聖の身には一滴もかゝらず、オイ君晴れても道が悪い僕は日
 和下駄だから構はぬが其麻裏では歩けぬゆゑ君は土産の日光下
 駄即ち日の光るといふ下駄を穿て歸り玉へと嘲けられ残念なが
 ら言葉に任せて日の光る下駄を麻布へ向れば日和下駄は向島へ
 歸りぬ

旅 硯 終

明治三十四年三月十一日印刷
 明治三十四年三月十四日發行

定價金四拾五錢

著 者 饗 庭 與 三 郎

發 行 者 大 橋 新 太 郎

印 刷 者 石 川 金 太 郎

印 刷 所 英 舍

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地

東京市京橋區本町三丁目八番地

東京市京橋區本町三丁目八番地



發 兌 元

東京市日本橋區
 本町三丁目

博 文 館

饗庭篁村君著
聚寶盆

全壹冊 洋裝袖珍美本 正價金卅五錢
郵税金六錢

著者自から我家の至寶と稱する小説脚本、紀行等を聚めたるものなり、其文情筆致笑ふうち血涙あり、泣くうちに温情あり、啻に輕妙自在とのみ評し去らずして精讀再誦すべき珍書なり。

發兌元 東京本町三丁目 博文館

新刊 佐々木信綱先生編

竹柏園集

第一編

(製本出来)

洋裝袖珍總クローズ
正價金三拾五錢
郵税金六錢

心の強き人弱き人、清き人、さまざまの人相あつまりて、竹柏會
士あり、詩、歌、文、の會は組み立てられぬ。會員の中には、學生あり、博
あり、詩、歌、に縁遠き職をどれる學士あり、専ら詩の神に生涯を献ぐる
山深き里の僧侶あり、廣き林檎畠の主人あり、良家の夫人令嬢あり、
て旅より旅に暮らせるあり、か耕しかつ歌ふ農夫あり、敵に向
ひて獅子の如く猛り筆を執りては小羊の如く素直なる水兵あり、
かゝる人々相あつたりて、月毎の研究會春毎の大會に相つどひ相
語り、若くは消息の贈答に歌文の研究せること既に數年。いま
其會員の短歌新體詩日記紀行文スケッチの類をわつめて毎年二回
世に公せんとす。こゝに短歌數百首新體詩美文二百數十篇なり。素
よりしぬ。一冊子に過ぎず。好侶伴たるべきか。

博文館發兌紀行書類

- 通俗日本地理 大和田建樹君著 正價貳拾五錢 全一冊 郵稅八錢
- 通俗世界地理 澁江保君著 正價參拾錢 全一冊 郵稅八錢
- 旅行案內 三宅青軒君著 正價貳拾錢 全一冊 郵稅六錢
- 紀行文集 大橋乙羽君校訂 正價六拾錢 全一冊 郵稅拾六錢
- 續紀行文集 岸上實軒君校訂 正價六拾錢 全一冊 郵稅拾六錢
- 俳諧紀行文集 佐藤飯人君編 正價貳拾五錢 全一冊 郵稅六錢
- 幼年日本地理 巖谷小波君編 正價拾五錢 全一冊 郵稅四錢
- 幼年世界地理 巖谷小波君編 正價拾五錢 全一冊 郵稅四錢

- 千山萬水 大橋乙羽君著 正價五拾錢 全一冊 郵稅拾錢
- 續千山萬水 大橋乙羽君著 正價五拾錢 全一冊 郵稅拾錢
- 南船北馬 田山花袋君著 正價四拾錢 全一冊 郵稅六錢
- 耶馬溪 大橋乙羽君著 正價四拾錢 全一冊 郵稅四錢
- 支那燕山楚水 內藤湖南君著 正價四拾五錢 全一冊 郵稅六錢
- 歐山米水 大橋乙羽君著 正價壹圓五拾錢 全一冊 郵稅拾錢
- 漫遊案內 野崎左文君編 正價四拾錢 全一冊 郵稅八錢
- 歐米漫遊雜記 鎌田榮吉君著 正價四拾五錢 全一冊 郵稅八錢
- 大英國漫遊實記 水田榮雄君著 正價七拾錢 全一冊 郵稅八錢
- 西伯利亞漫遊白山水 文學士石澤發身君著 正價四拾五錢 全一冊 郵稅六錢

25057

文學士大町桂月先生著

（製本既成）

新刊

一 蓑 一 笠

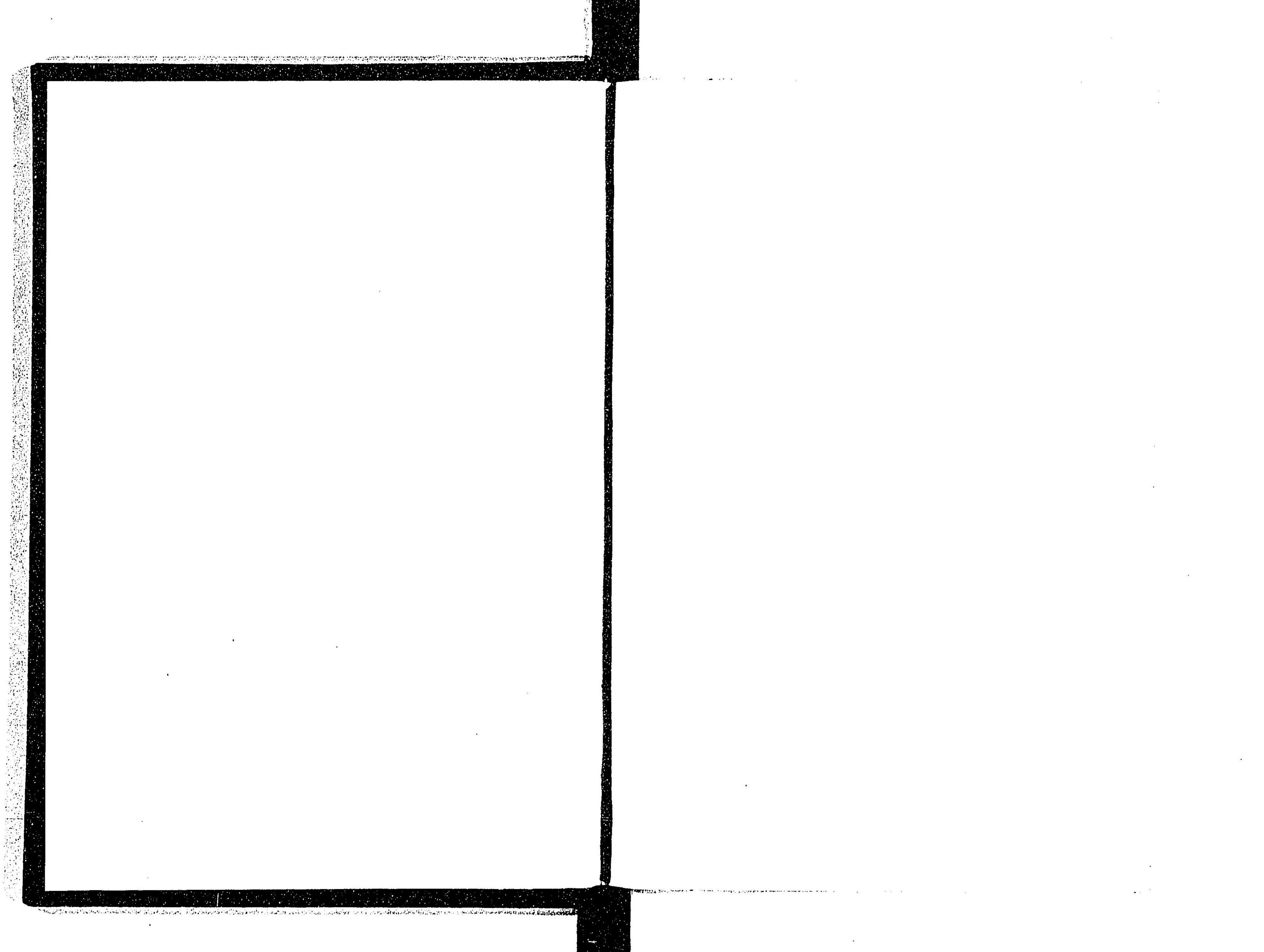
全壹冊洋裝袖珍
正價金三拾錢
郵稅六錢

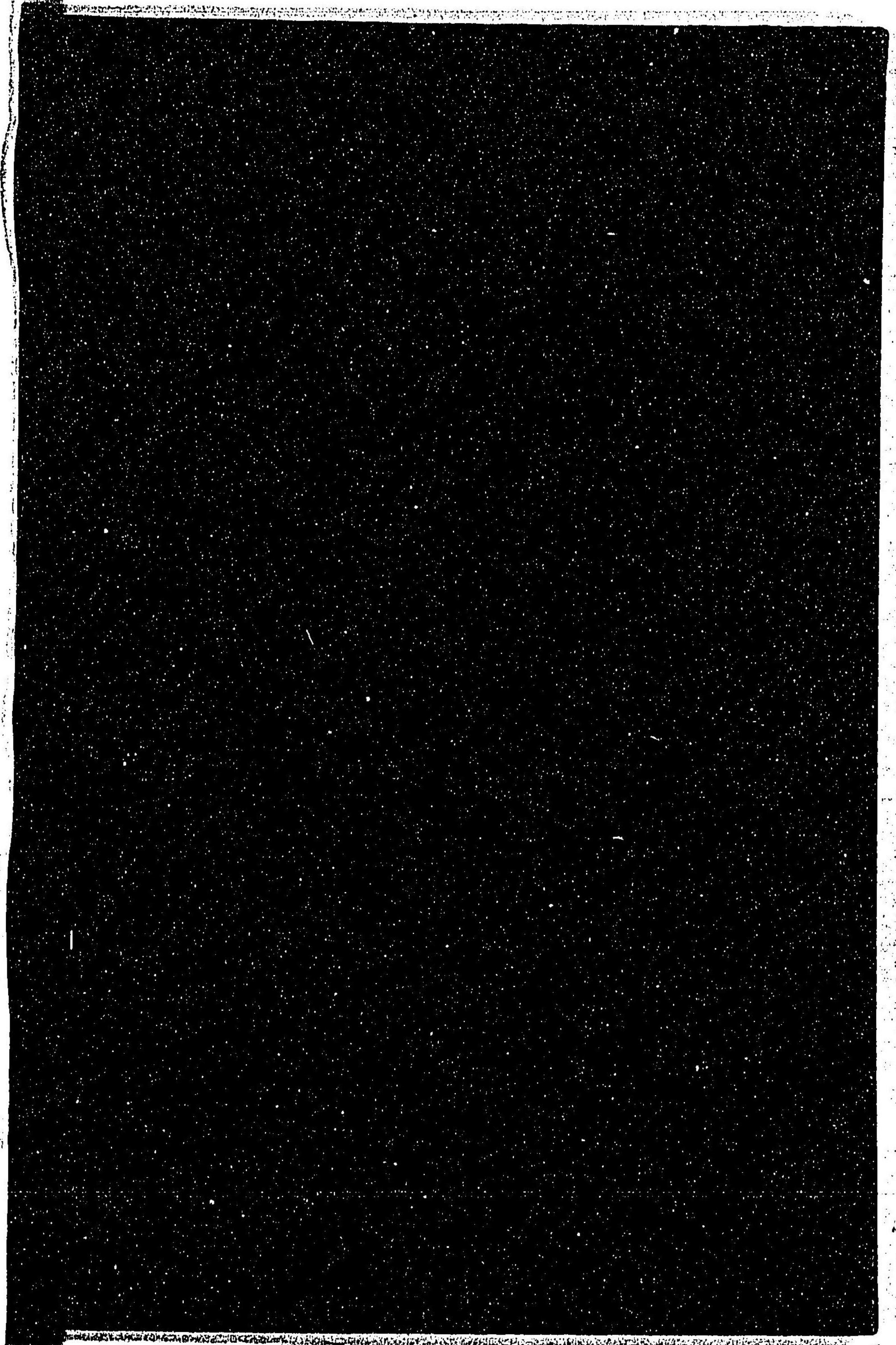
桂月先生筆に健にして又脚に健也閑あれば則ち筆を載せ飄々として天下の名山大川に遊び興到り筆を落せば筆に聲あり筆致或は雄壯或は優婉花の如き美詞となり達意暢達の佳篇なり千變萬化端倪すべからず此篇先生の紀行を集む山や川や先生の快筆に驅られて紙表に躍動す以て臥遊に充つべし天下の才人必ず讀まざるべからず

發兌元

東京市日本橋區
本町三丁目

博文館





915.6

A231t

禁
複
写

096167-000-7

915.6-A231t

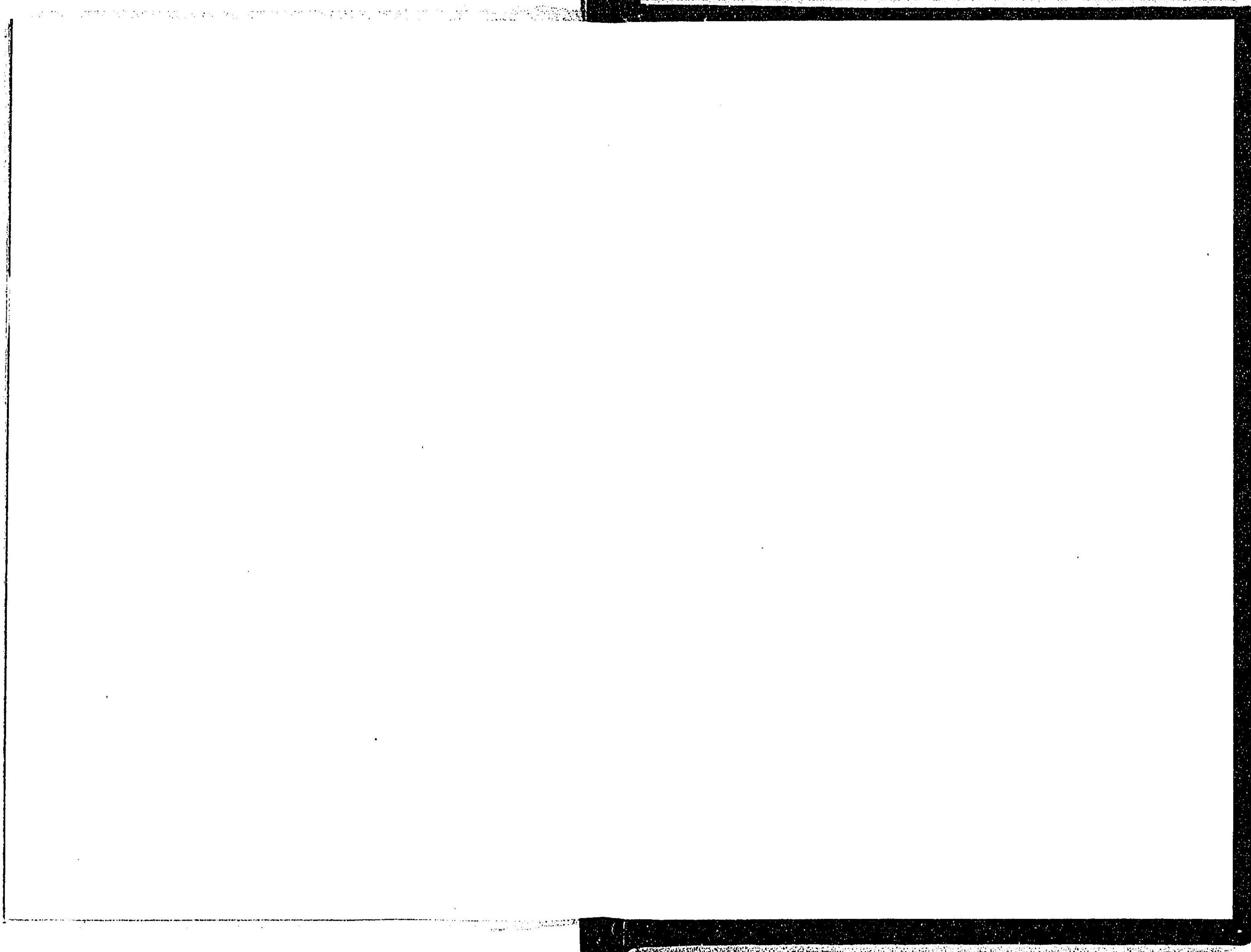
旅硯

饗庭篁村 / 著

M34

DBR-0445





IR5057

